



## 女兵士に恋して

松本 侑壬子・ジャーナリスト

未曾有の東北大震災の救援にアメリカは空母まで派遣して大規模な「トモダチ作戦」を展開した。若い兵士が「(人の命を救う) この任務を誇りに思う」と語っていた。本音だと思う。戦場で戦う＝人を殺すのではなく、人の命を救い、被災者を救援するほうが、どんなに尊くやり甲斐のある仕事であろうか。もちろん、被災側にとっても、大歓迎の力強い外国の援軍である。

——今月の映画の主人公たちを見て、改めてこの映画の悲劇を思う。フィンランド内戦で敵味方の兵士同士の許されぬ悲しい恋の物語である。

約100年前、北欧フィンランドは国を二つに分けた骨肉の争いを展開していた。隣国ロシアの革命の影響下で、ロシアを後ろ盾とする労働者らの赤衛隊と、ドイツ軍の支援を受けたブルジョワ勢力の白衛隊の攻防戦。1918年3月から4月にかけて、激化する戦いの中を赤衛隊が敗走を続ける。隊には「男女平等の信条から」女性兵士も少数ながら参加していた。

年若いリーダー、ミーナ(ピヒラ・ヴィータラ)は女性兵士の仲間と森の中で白衛隊に捕えられてしまう。親友マルックに自分が死んだら息子エイノを迎えに行くよう頼まれる。女性兵士らは敵兵に強姦された挙句、逃亡兵士として射殺されるが、ミーナは逃亡しようとして、白軍の准士官アーロ(サムリ・ヴァウラモ)に再び捕えら

れる。アーロはミーナをすぐに殺さずに公平な裁判を受けさせるべく、評判の高いエーミル判事のもとに護送する。湖を渡る途中でミーナが抵抗し、二人の乗った船が遭難。無人の小島で衰弱していくミーナを懸命に看護するアーロに、ミーナは少しずつ心を開き始める。

だが、ようやくたどり着いたエーミル判事のもとで、ミーナはいきなり拘束され、二人は引き離される。判事の関心はアーロにあった。知的で美男で純真な青年アーロに屈折した同性愛者エーミルはさまざまな試練を与える。アーロはミーナの頼みで少年エイノの様子を見に行き、ミーナに裁判で命が助かる方法を教える。だが、ミーナはあくまでも自分の信念を曲げず、死刑が宣告される。そんなミーナの釈放のために、アーロはエーミルに自分の体を売りさえる。

精一杯純情を捧げるアーロに比べ、ミーナは使命のためなら自身の性さえ武器にする。戦場では恋愛など無用のはずだった。だが…。

血なまぐさい戦闘をも包み込む美しい早春の大自然の中で、梢を揺らす風や枯草の温もりが切ない。彼女を救うためなら、何でもしたい。愛を確かめあったわけではない。ただ、この思いを彼女と分かちあいたい—アーロは白衛隊の追手から後ろ手にミーナを庇いながら「逃げる」と叫ぶ。すかさず「一緒に!」とのミーナの声。アーロの思いに初めて応えたミーナの愛の言葉だった。うれしさに高鳴るアーロの胸を、味方の弾丸が貫く、「この裏切り者!」と。

ミーナを支えたものは、使命感か信念か、それとも初めて得た愛の力だったろうか。生き延びたミーナも、心に深い痛手を負う。フィンランド国民に深い心の傷を残した悲劇の寓話のような作品。同じ国民同士が戦う悲劇は、現在もリビアなど世界各地で進行中である。

### 『4月の涙』

フィンランド・ドイツ・ギリシャ合作映画 (114分) /  
アク・ロウヒミエス監督

5月7日公開

